

厚生労働記者会・厚生日比谷クラブ
文部科学記者会・科学記者会
横浜市政記者クラブ 同時発表

2023年10月6日
横浜市立大学

COVID-19 パンデミックによる消化器がんの診断数と Stage 推移の再報告 ～大腸がんの診断数は回復したが、胃がんの診断数は減少継続～

横浜市立大大学院医学研究科 肝胆膵消化器病学の日暮琢磨講師、同大大学院生 葛生健人さんらの研究グループは、消化器がんの新規診断に関して COVID-19 の流行と共にどのように変化するか、流行以前から 2021 年までの期間で解析した消化器がんの診断数、Stage*¹、診断契機を初めて報告しました。同研究グループは以前、消化器がんの新規診断に関して COVID-19 が流行する前と流行期（2020 年）での変化を調べた結果*²、胃がん、大腸がん、特に早期胃がんと早期大腸がんの診断数が有意に減少し、大腸がんに関しては進行した Stage で発見される例が増加したことを報告しました。今回、その継続研究としてワクチンが普及し始め、徐々に社会活動が活発になってきた 2021 年まで観察期間を延ばして解析した結果を新たに報告しました（図 1・2）。

解析の結果、COVID-19 による感染対策による受診抑制や生活様式の変化の影響はもうしばらく続くと思われましたが、既に大腸がんに関しては COVID-19 流行前の水準へ戻っていました。しかし、胃がんは依然として COVID-19 流行前と比較し有意に減少しており、特に早期胃がんの診断数が有意に減少したままでした。また Stage に関しては大腸がんと胃がんで進行した Stage で発見される例が増加していました（図 3・4）。これは、大腸がんスクリーニングとしては便潜血検査という侵襲の少ない検査があるため、診断数が回復してきているのに対し、早期胃がんスクリーニングとしては侵襲の大きな胃カメラ検査しかないことが影響しているのではないかと考えられます。胃カメラ検査を受けるべき患者に適切なタイミングで検査を受けてもらうことが重要です。

本研究成果は、「Cancers」に掲載されています。（2023 年 9 月 4 日掲載）

研究成果のポイント

- 新規消化器がんに対する COVID-19 流行による受診抑制の影響はすでに薄れてきている。
- 2021 年も胃がんの診断数は依然有意に減少していた。特に早期胃がんは減少継続。
- 胃カメラ検査を受けるべき患者に適切なタイミングで検査を受けてもらうことが重要。

研究背景

本研究グループは、先行研究で、消化器がんの新規診断を COVID-19 が流行する前と流行期（2020 年）での変化を調べた結果、胃がん、大腸がん、特に早期胃がんと早期大腸がんの診断数が有意に減少し、大腸がんに関しては進行した Stage で発見される例が増加したことを報告しています。その後、日本を含め諸外国からも同様な結果を報告する研究が発表されました。本研究では、がんの診断数の推移を明らかにするために先行研究と同様のデータベースを用いて、ワクチンが普及し始め、ウイルス株も変わり致死率が低下し、徐々に社会活動が活発になってきた 2021 年まで観察期間を延ばして解析を行いました。

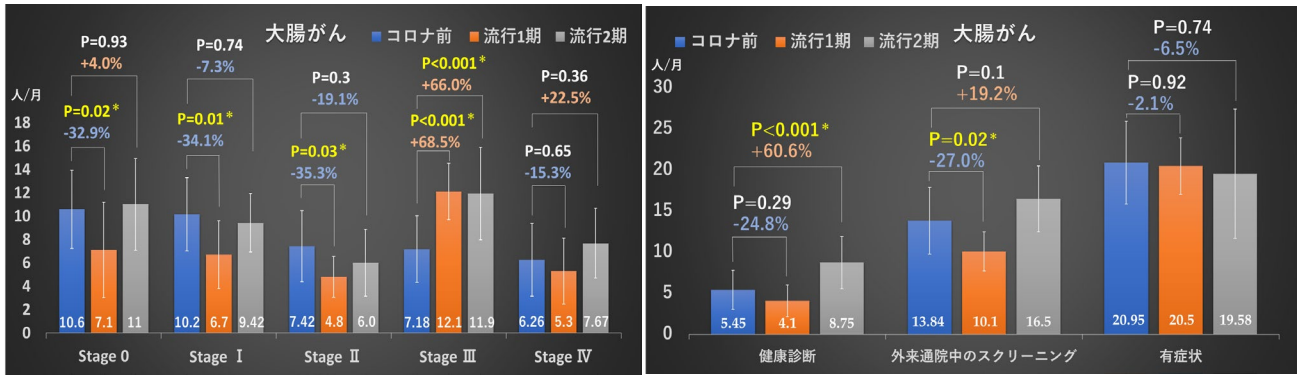


図 1・2 大腸がんの Stage 別の月平均の新規診断患者数の変化と診断契機の変化

(P 値 *3 が黄色い Stage が有意な減少もしくは増加を示しています)

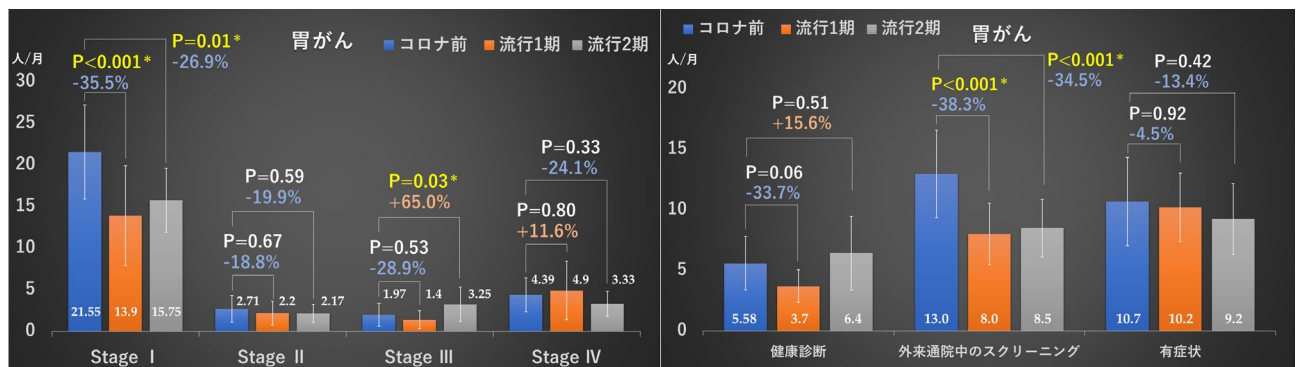


図 3・4 胃がんの Stage 別の月平均の新規診断患者数の変化と診断契機の変化

(P 値が黄色い Stage が有意な減少もしくは増加を示しています)

研究概要と結果

本研究グループは横浜市立大学附属病院と国立病院機構横浜医療センターの 2 病院において 2017 年から 2021 年までの 5 年間で新たに消化器がん（食道がん、胃がん、大腸がん、膵がん、肝臓がん、胆道がん）と診断された全患者 6453 人を調べました。2017 年から 2020 年 2 月までを COVID-19 流行前、2020 年 3 月から 12 月を流行 1 期（自粛期）、2021 年 1 月から 12 月を流行 2 期（with COVID-19）と分類し各期間で診断数、診断時の Stage、今回はがん発見契機についても比較検討しました。

その結果、新規の大腸がんの診断数は流行前と比較し、流行 1 期では 13.5%と有意に減少していたが流行 2 期では 10.6%増加していました。しかし、新規の胃がんの診断数は流行前と比較し、流行 1 期では 26.8%有意に減少し、流行 2 期でも 19.9%の有意な減少を認めました（図 5）。中でも胃がん Stage I は流行 2 期でも 26.9%の有意な減少が持続していました（図 3）。一方で流行前と比較し流行 2 期で大腸がんの Stage III は 66.0%、胃がんの Stage III は 65.0%の有意な増加を認めました（図 1）。

また発見契機を見てみると健診から見つかるがんは大腸がん、胃がんともに流行 2 期で流行前より増加しているが、外来フォロー中の患者のスクリーニングで見つかるがん流行前と比較し流行 2 期で大腸がんは 19.2%増加しているのに対して、胃がんは 34.5%の有意な減少が続いていました（図 2・4）。

その他の膵臓がん、食道がん、肝臓がん、胆道がんに関してはそれぞれ変化に特徴はあるものの有意な変化は認めませんでした（図 6～図 13）。

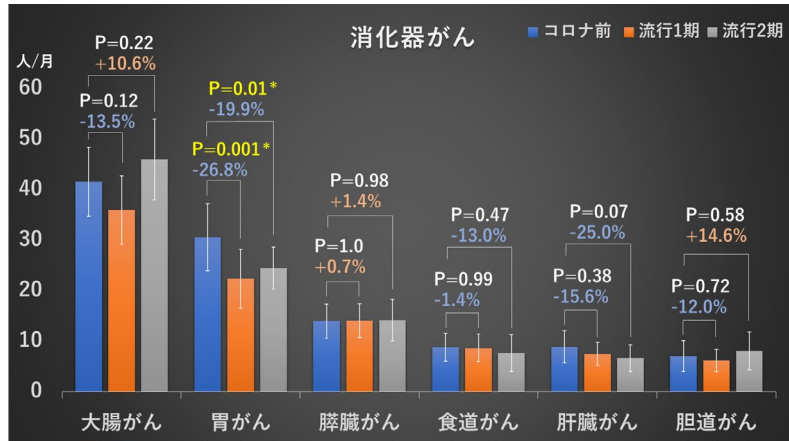


図5 消化器がん別の新たにがんと診断された月平均の患者数の変化 (P値が黄色い Stage が有意な減少もしくは増加を示しています)

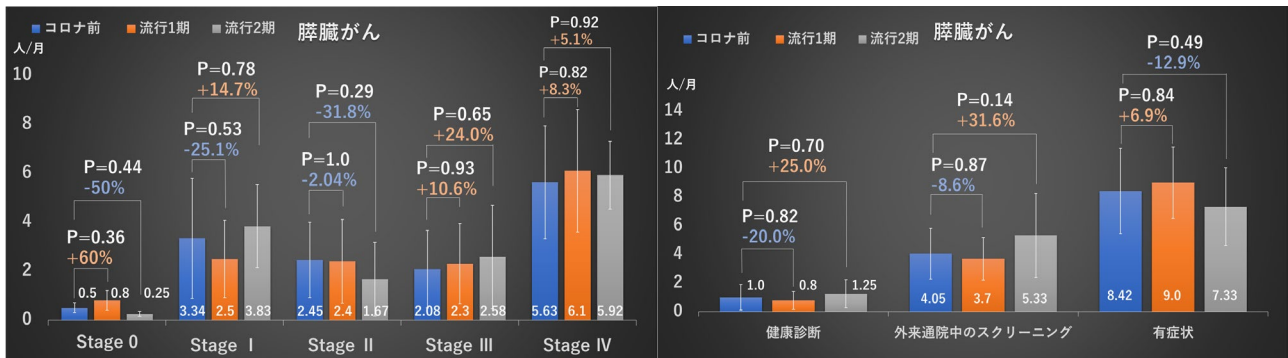


図6・7 膵臓がんの Stage 別の月平均の患者数の変化と診断契機の変化

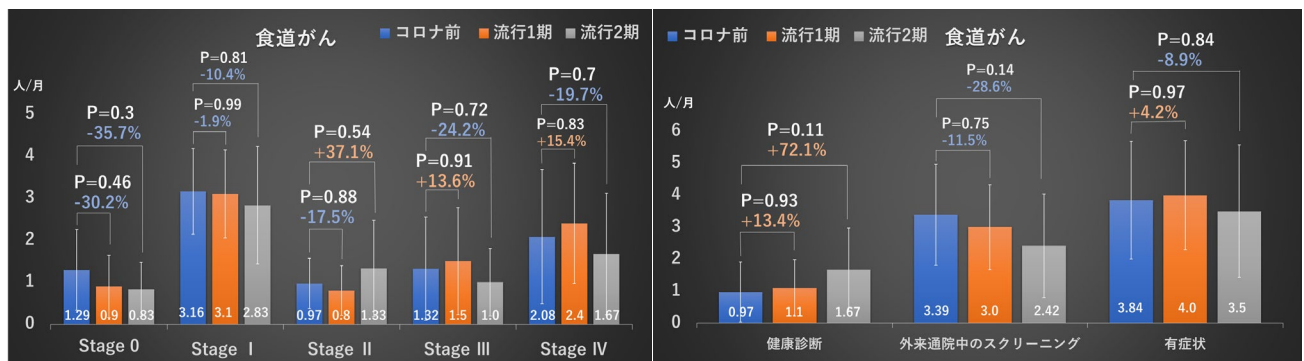


図8・9 食道がんの Stage 別の月平均の患者数の変化と診断契機の変化

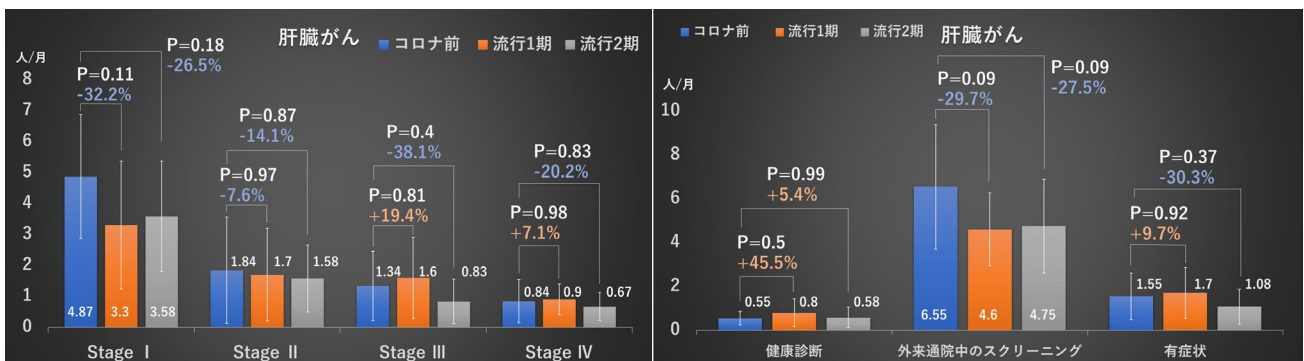


図10・11 肝臓がんの Stage 別の月平均の患者数の変化と診断契機の変化

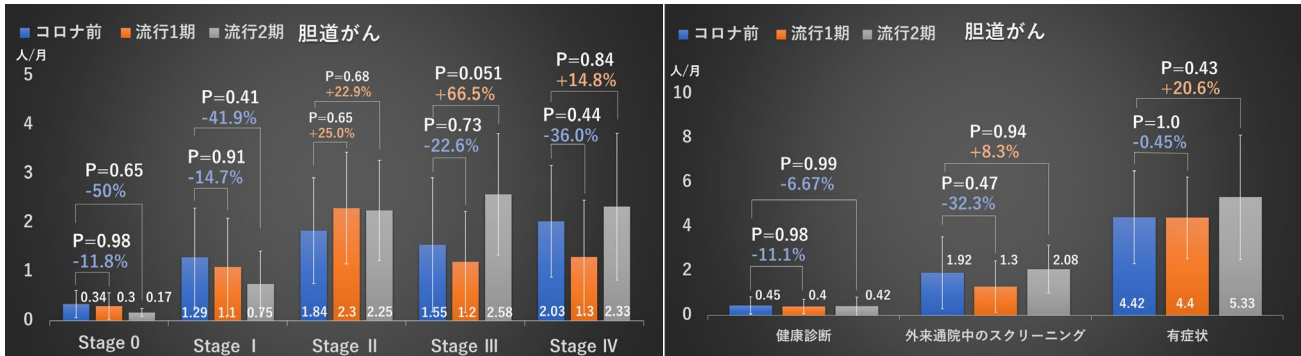


図 12・13 胆道がんの Stage 別の月平均の患者数の変化と診断契機の変化

研究結果の意義と今後の展望

消化器がんに対する COVID-19 の影響はもうしばらく持続するのではないかと考えられていましたが、病院への受診制限がなく、また医療機関への利便性が高い日本においては既に COVID-19 の影響は薄れてきていました。

内視鏡件数は流行初期の医療機関への受診抑制によって一度減少しましたが大腸カメラ検査、胃カメラ検査ともに COVID-19 前と比べ有意な差はなくなっていました。しかし、大腸がん患者数が COVID-19 前のレベルに戻ったのに対して胃がん患者数は少ないままでした。ピロリ感染率の低下に伴い胃がん患者数自体が減少している影響もあると思われませんが、健診だけではなく外来フォロー中のスクリーニングで見つかる胃がんが有意に減少したままであることを考慮すると、これまで 1 度も胃カメラ検査を受けていなかったり、胃がんリスクの高い萎縮性胃炎でも定期フォローを行っていなかったりする可能性があります。つまり胃カメラ検査を受けるべき患者に適切なタイミングで検査を受けるように呼びかけることが大切だと考えられます。

COVID-19 の流行という不測の事態によって、図らずも、受診控えによるがん診断への影響を知ることができ、この結果は今後のがん対策の一助になると思われれます。少子高齢化が進む中、限られた医療資源を効率よく使用できるように、がんリスクの高い患者さんへの啓発を勧めるとともに、検査を受けるべき患者へしっかり検査を推奨できるように医師への啓発も勧めていきたいと考えています。

論文情報

タイトル：**Changes in the Number of Gastrointestinal Cancers and Stage at Diagnosis with COVID-19 Pandemic in Japan: A Multicenter Cohort Study**

Cancers

著者：Kento Kuzuu, Noboru Misawa, Keiichi Ashikari, Shigeki Tamura, Shingo Kato, Kunihiro Hosono, Masato Yoneda, Takashi Nonaka, Shozo Matsushima, Tatsuji Komatsu, Atsushi Nakajima, Takuma Higurashi

掲載雑誌：Cancers

DOI：10.3390/cancers15174410

用語説明

* 1 Stage：がんの進行度を示す病期のこと。数値が大きくなるほど進行していることを示す。がんの種類によって多少異なるが多くの場合 Stage0-1 が早期がんである。

Press Release

*2 2021 年に発表した研究成果：COVID-19 パンデミックによる受診抑制が消化器がんに及ぼした影響
~胃がん・大腸がん（特に早期）の診断数が減少し、診断時の Stage が進行~

<https://www.yokohama-cu.ac.jp/news/2021/20210916higurashi.html>

*3 P 値：統計学的に有意な差があるかを解析する際に用いる指標(確率)。P 値が 0.05 以下の際に有意な差があるとしている。

SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS 横浜市立大学は、
様々な取り組みを
通じてSDGsの達
成を目指します。

